

## 財産管理をめぐる諸問題

1903年法王レオーネ13世が亡くなり、ピオ10世がコンクラーベの後、新法王として選出された。新法王は、ヴァチカンの金庫が空であることを発見し、愕然とした。新法王はただちに緊急緊縮財政案を発表。法王レオーネ13世の時代、マスコミは数千万リラを集めるキャンペーンを打ち出し、それは大成功を収めた。しかし、それは人々からの収奪だったようだ。法王選挙の後、その事件が解明された。当時93歳だったレオーネ13世は、信頼のおけるある聖職者に鉄の金庫を手渡したという。そして、その1カ月後のコンクラーベで選ばれたピオ10世に、その金庫を託した。この事実は、2021年7月24日にヴァチカン聖省財産管理局（APSA）が明らかにした。APSAとは、ヴァチカンの銀行、ヴァチカン市国の長官とともに、ヴァチカンを経済的に維持する機関だ。その金庫の財産は、公共機関に諮ることなく、ヴァチカン内の事柄に使うことができ、個人の意思で使われたり、時には無駄金を使うことにもなる。そのため、金庫の財産はほぼゼロになってしまっていた。もちろん近年では財産管理はしっかりとなされるようになってきている。

APSAの財産は2019年12月、8億8,600万ユーロ（約115億円）と発表された。この数字だけ見れば、ヴァチカンは金持ちのようであるが、実際にはそうではない。ヴァチカン内の諸費用はそれほど多くはないが、ヴァチカンに繋がる多くの教育機関のほか、関連の国際機関に出資しており、その額は巨額になる。

この財産の大部分は、1929年ヴァチカンがイタリアから独立する時に、当時のムッソリーニ政権から、ヴァチカンへの賠償金として支払われた17億5,000万リラ（当時の換算率で約9億円）である。しかし、そのお金はヴァチカン市国を整備したり、多くの事務所が入る巨大な建物を造ったり、職員の住居を数多く建てたりして、所持する額はきわめて少ないものになった。

第2次世界大戦後、ヴァチカンが世界中の信者に奉納金を呼びかけたことにより、その財政は急激に豊かになった。毎年6月29日の「聖ペテロ、聖パオロの日」を中心に、世界各地のカソリック教会で「教会への献納金」が集められているからである。そこから、法王はヴァチカンの事業で赤字になったところを補填していくのだ。法王がカリタスのために使えるのは全額の10%だけである。それ以外の予算の大部分は、ヴァチカンの聖省、聖庁に予算として割り当てられている。

そのため、2018年には、7,500万ユーロ（約99億円）の赤字を計上することになった。昨年（2020年）は6,630万ユーロ（約86億円）の赤字となった。教会への献納金が年々減少していることが大きな原因である。具体的に示すと、2014年の献金額は830万ドル（約92億円）であった。その後、年々減少して、2020年の献金の合計額は540万ドル（約60億円）と下がっている。

ヴァチカンの国務省が保有する財産の総額は約6億5,000万ユーロ（約845億円）である。しかし、ヴァチカンの所有する

莫大な不動産やミケランジェロ、ラファエロたちの芸術作品はここには含まれていない。

## ロンドンの建物購入をめぐる疑惑事件

ヴァチカンの動産の所有額や使用額が明らかにされるきっかけになったのは、ロンドンの中心街スロアン通りの建物購入をめぐる、ヴァチカンが大きな損害を被った事件が発覚したことによる。この購入に関しては、2016年から秘密裡に話が進められていた。そして話が具体化し、売り手側と買い手側の話し合いがしばしばなされるようになった。商談が進展したのは、2018年12月、ミラノの高級ホテル・ブルガリに売り手と買い手のメンバー3人が集まった時からだ。これは売買成立後どのように金銭をやり取りするかという話し合いであった。1人はブローカーであるジャンルイジ・トルツイ、もう一方はヴァチカンの指導者の1人ファブリツィオ・ティーラバッシ、3人目がヴァチカンの財政の権限を持っているエンリコ・グラッシである。

トルツイはその席で次のように語った。「ご存知とは思いますが、この取引は世界と関係している。これはヴァチカン側、イギリス側双方もよく了解しているはずだ。この取引は絶対に良いと思う。誰にも損はさせない。ただし、これは2019年10月まで秘密にしておかなければならない。」話し合いの席では、各人の懐に入る金額についても話し合われた。ブローカーはさらに話を続けた。「ファブリよ！今までに俺はいくら稼いできたか、分かるか？」。そして、話は信者から法王に寄進されたヴァチカンの予備金へと進んでいったのである。

2019年12月19日、ロンドンのスロアン通りの建物を購入するために、20億ユーロ（約2600億円）が用意され、2週間後に正式契約が成立した。この購入に関して、実際に手足のように動いたのはヴァチカンの枢機卿ベッチウの相談役チェチリア・マロンニャだった。マロンニャは、その事件の首謀者の1人として逮捕された。

ヴァチカンには多くの聖庁がある。通常の業務は、それぞれの聖庁が担当している。しかし、ヴァチカン全体の問題の場合、しかも費用負担が巨額な時には、その最終的判断はローマ法王が行うことになっている。それが、この件では枢機卿ベッチウの独自判断で、法王に相談することもなく、ロンドンの建物の購入を採決してしまったのだ。ローマ法王がヴァチカンの意思決定の筆頭だとすれば、その当時枢機卿ベッチウは3番目に位置していた。裏の動きを知った法王は、当然ながら激怒した。ベッチウは枢機卿の地位を剥奪され、ヴァチカンのすべての役職から外されてしまった。そのような動きの中で、この10年間公表されなかったヴァチカン所有の財産がすべて明るみにされたのだ。

ロンドンの建物の購入に関しての裁判は、初判が本年7月27日に開かれた。その被告人は10人で、枢機卿ベッチウの追放、信者の献金、損失金、被害賠償金の補填をどうするかを審議された。ロンドンの建物の購入問題から法廷での議論が始まった。しかし、次回の公判日はまだ決まっていない。